

書道 I

.....

第1回

書道監修・執筆 長野秀章

書はアートだ！ ～書写から書道へ～

今回学ぶこと

書は漢字や平仮名、片仮名を使って、自分の気持ちや感動を表現するアート。

中学校までは「書写」として国語の時間に学んできたが、高等学校の書道は芸術科目である。

今回は、芸術としての書の世界への入門として、書道の魅力をいろいろな角度から紹介する。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

漢字／仮名／筆／墨^{すみ}／硯^{すずり}／紙／毛筆／硬筆／鑑賞

漢字と仮名の調和

手書きの書の特徴をいわゆる「活字」と比較して考えてみよう。本や新聞などに使われる活字は、基本的に全部を正方形におさまるようにしている。だから漢字もひらがなも大きさが同じである。しかし、手書きの字は違う。ために、活字のように手書きで書いてみると、平仮名が大きく見える。手書きの書では、漢字より平仮名を小さく書くことが多い。また文字の形も正方形だけではなく、三角形や丸、台形などさまざまだ。こうして漢字と仮名の調和を作り出している。硬筆で書くときにも意識してみよう。

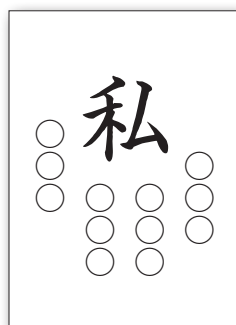
文房四宝 (筆・墨・硯・紙)

文房四宝とは筆、墨、硯、紙の4つを指す。書道用具の中でも特に大切にされている。

今回の書



今回の課題



自分を意味する「私」、「僕」などを書く。
その周りに自分の好きな言葉や自分のことを表現する言葉を書いてみよう！

筆を選ぶときには毛の硬さも毛の長さも中くらいのものが初心者には使いやすい。筆を下ろすときには、穂を固めているのりをよく落とそう。

墨を磨るときには、硯のくぼんだところ（海）に水を入れ、平らなところ（陸）に少し水を持ってきてよく磨る。墨は優しくていねいに磨ろう。

硯は、墨がある程度入り持ち運びのできる 15 cm 程度のもの、紙は少し厚めの半紙が使いやすい。それぞれの使い方を理解していこう。

書の鑑賞とは？

書を学ぶうえでは、優れた作品を鑑賞することも重要だ。

今回訪れた書道博物館は画家で書家でもあった中村不折（1866～1943）のコレクションを引き継いで作られた。世界的にも貴重な中国や日本の書が数多く展示されている。

ここでは2つの作品を鑑賞する。一つ目は夏目漱石（1867～1916）が中村不折にあてた手紙。「我輩は猫である」の挿絵を描いた中村不折に対するお礼の手紙だ。パソコンなど無かった昔の人は日ごろから書に親しみ、手書きで気持ちを伝え合っていたことが分かる。

二つ目は、中村不折の高さ6mにも及ぶ書。唐時代の顔真卿（709～758）の「裴將軍詩」を基にした作品。基の書も自由に書かれているが、それを下敷きにしてさらに自由に表現している。

書を鑑賞するときには絵画を見るように書全体の雰囲気や線の表現などを感じよう。また気に入った文字を見つけるのも作品を楽しむきっかけになる。

達人からひとこと！

書の鑑賞とは

書の鑑賞のしかたには順序があります。その対象となる作品に向かって、何が書いてあるか。何という文字がなのかという“読み”に進む前に作品体を絵画や写真を見るように、見るのが大切です。その過程の中でたとえ一文字でも部分でも読める文字があったり、読みにくくても何か面白い。というような興味がわく字を見つけることから始めましょう。

それは、文字そのものではなくても、部分、例えばかすれた線やにじんだ線など何か興味やどうしてこうなったんだろうという疑問でもよいのです。その後で、何て書いてあるのかとか、伝えている内容とか、誰が書いたのかということを知って書の鑑賞ができあがります。



達人
長野秀章

● 書道博物館

住 東京都台東区根岸 2-10-4

HP <http://www.taitocity.net/zaidan/shodou/>